

日本ボストン会会報

発行所 日本ボストン会事務局

会長退任のご挨拶

会長 鶴 正登

山村章前会長が昨年ご都合により任期半ばで退任され、その残余期間、私が会長職を遂行してまいりましたが、今年の総会をもって法眼健作様に引継ぎをいたします。会長在任中の会員の皆様のご支援・ご協力に対して、篤く御礼を申し上げます。

法眼新会長につきましては、既発行の会報にてご紹介しておりますし、また既に総会・幹事会を含めて各種会合にご参加になっておられますので、会員の皆様もそのお人柄を含めて十分ご存知のことと思います。元ボストン総領事であり、その後もホノルル総領事、カナダ大使、国連事務次長などを歴任され、退官後は NEC 顧問、本田技研工業取締役を務められ、現在は明治大学の客員教授も兼ねておられるなど、幅広くご活躍中です。飾らないお人柄と共に、外交の現場の裏話や昨今の世界情勢の分析など興味深い話を独特の話術で披露して頂けますので、これまで各種催物にあまり参加されていない会員にもご参加を強くお勧めいたします。

また会長の仕事の一つが次々期会長候補の選定ですので、MIT 関係者との条件の中で佐々木元会長のご助言も得て、既に当会会員ですが、㈱インフォマティクス社長の長島雅則様にお引き受け頂くことにいたしました。長島様は1949年生まれ、東京大学工学部建築科で学士・修士を取得後、MITの修士課程も修了、会社経営の傍ら国内外の大学において

講師を務められたり、各種団体の要職を歴任されるなど多方面に亘りご活躍中です。今から2年後の2012年の総会から会長を務めて頂くこととなります。

さて昨今の日本ボストン会の活動状況ですが、各副会長や催物担当の幹事の皆様のご努力により、引き続き活発に行われています。特に昨年からはハーバード大学の日本同窓会である Harvard Club of Japan との共催事業を始めました。同会カール・ケイ会長からの提案の応じ、年に1回、夫々の催物にお互いの会員の参加を呼びかけることにいたしました。

まず昨年11月にHCJが主催したジャズディナーコンサートに日本ボストン会から13名の会員が参加しました。一方今年の4月の日本ボストン会主催の観桜会には12名のHCJ会員が参加しました。交流の輪を広げる良い機会ですので、より多くの会員の参加を期待しております。

会員の皆様のご支援・ご協力で改めて感謝申し上げますとともに、皆様のご健勝・ご活躍を祈念いたしまして退任のご挨拶といたします。

本当にありがとうございました。

日本ボストン会 総会・懇親会のお知らせ (同封チラシ参照)

日時： 平成22年11月19日(金)午後6時開場、午後6時半開会
場所： NEC三田ハウス芝クラブ (JR田町駅、都営地下鉄三田駅下車)
港区芝5-21-7、TEL 03-5443-1400
会費： 当日払い お一人 6,000円 / (同伴者 5,000円)
事前送金 お一人 5,000円 / (同伴者 5,000円)

送金方法：

申し込み先：日本ボストン会事務局(同封ハガキ、又はE-mailにて11月12日までに
お知らせ下さい。E-mail：

日本ボストン会の活動はホームページにてご覧下さい。<http://www1.biglobe.ne.jp/~boston/>



日本ボストン会 観桜会(二〇一〇年四月四日、日曜日)
九段下 グランド・パレス (敬称略)

宮野夫人

SHANTIL Benjamin (シャティール、ベンジャミン)

小野田 勝洋 関 尚子

成井 彩 近藤 百合子

酒井 一郎 池田 洋子

宮野 明雄 藤盛 富美子

関 直彦 俣野 善彦

棚橋 征一 KAY Carl(ケイ、カール) 酒井 典子

阮黎雲(ゲン リウン) 藤盛 紀明 鶴 正登

升田 恵理子 成井 弦

生田 英機 Mr. HOSTROPE(ホストロップ) 鶴 経子

成井 夫人 Ms. HOSTROPE Arlene (ホストロップ、アーリン) 俣野 眞由美

ゲスト参加
棚橋 宮野 夫妻
篠崎 成井 夫妻
小野田 成井 彩
生田 井沢 修
三森さん

会員
関 夫妻
酒井夫妻
鶴 夫妻
藤盛夫妻
近藤夫妻
俣野夫妻
カール ケイ夫妻

東京大学大学院：
ゲン リウン、ベンジャミン
シャティール、升田恵理子
ホストロップ夫妻

以上

投稿

米国人作家 James Bradley 氏の講演と

ボストン日本協会 Grilli 理事長の来日

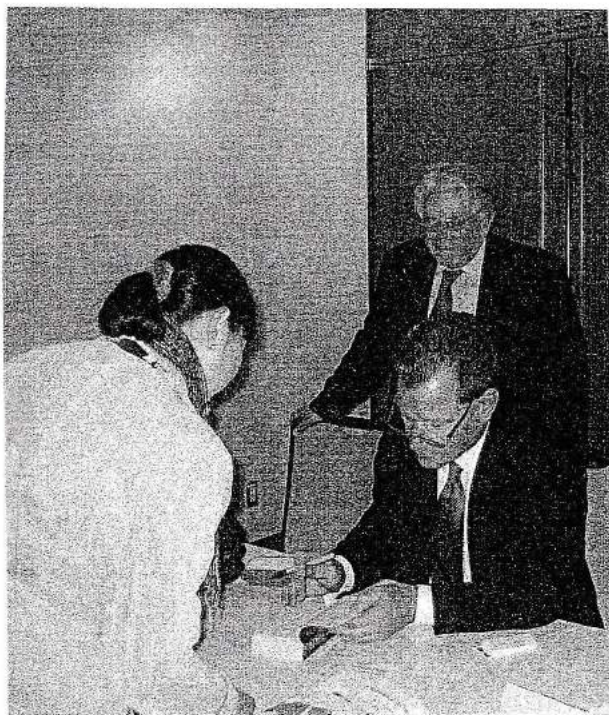
去る3月29日夕刻、六本木・鳥居坂にある国際文化会館において、「硫黄島の星条旗」(Flags of Our Fathers)等のベストセラーで知られる米国の作家 James Bradley 氏の講演会がありました。演題は「第二次世界大戦の原点とこれからの米国・アジア関係」で、同氏が昨年刊行した新著「The Imperial Cruise : A Secret History of Empire and War」のさわりを紹介するとともに、青春時代に世界あちこちの国を漫遊して得たご自身の人間理解、作家として成功した後、米国の高校生を日本、中国に派遣して相互理解を促進する目的で設立したJ.ブラッドリー平和財団についても触れる大変興味深い内容でした。

上記の新著では、セオドア・ルーズベルト大統領が、人種理論を基にして日米外交を行ったこと、また、議会やノーベル賞選考委員会の知らないところで、日本が大韓帝国(朝鮮)へその支配権を及ぼすことを認める協定を日本政府と交わしていたこと等が、Bradley 氏の綿密な調査に基いて明らかにされています。ニューヨーク・タイムズ紙からは「T.ルーズ

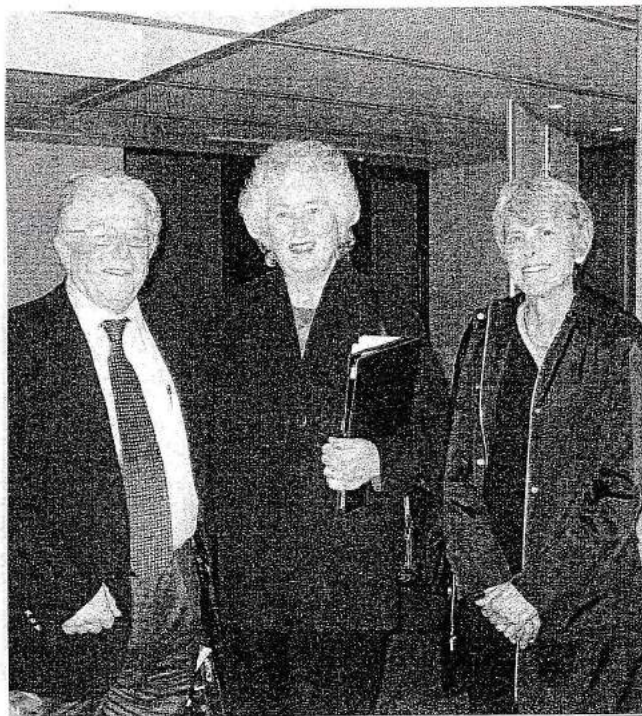
ベルト大統領に対する従来の評価を新たにするほどの衝撃である」との書評を得たそうです。

当日は講演に先立って、Bradley 氏に随行して来日した、ボストン日本協会(Japan Society of Boston)の Grilli 理事長が演壇で講師の紹介を行いました。JSB が5月に開催する年次ディナーにおいて、同氏にキーノート・スピーチをお願いした関係で知り合ったそうです。日本ボストン会の幹事のおひとり、藤崎先生も別途、この講演会の開催予定に気付かれて、Grilli 理事長に会える折角の機会なので、他の幹事さんにもお知らせしてはどうかのご提案を頂いたので、急遽、メールでお知らせした次第です。(出席は藤崎先生と小生のみでした)。

講演終了後、Grilli 理事長ご夫妻に挨拶して、近々、BAJ 恒例の「お花見の会」があるので参加しませんかと打診したところ、生憎、瀬戸内海の直島へ旅行する予定が入っているようで、残念でした。受付では Bradley 氏が、新著を購入した参加者の求めに応じて著者のサインを行いました。(棚橋征一記)



著者サインするブラッドリー氏



(左から)グリーリ理事長、スーザン夫人、ご友人

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (VII)

山口 静一

【23】 帰国したフェノロサの抱負

この時期のフェノロサの仏教に関わる記録として、1891(明治24)年5月1日付けの興味深いメモがハーバード大学ホートン・ライブラリーに残っています。アメリカにおける自分の抱負を書き記したもので、アメリカを理想的社会に変革するために

.... 日本人の美的感覚、それを育んだ日本の仏教理念、同胞意識と犠牲的精神、平和と寛容、協調と人類愛に象徴される菩薩の心

が必要だと結んであるのです。

1893(明治26)年のシカゴ万博を前に出版された長詩『東と西』も、アメリカを西洋と東洋との中間に位置する国と見定め、西洋の物質文明と東洋の精神文化とを融合することによって新しい理想的な文化をアメリカに芽生えさせようとする主旨のものでした。その最終章「東と西の将来の結合」には「西洋の男性的力と東洋の女性的な美とが美術と宗教を媒介として合一する」理想の境地が謳われています。東洋的価値観とりわけ日本仏教に対する深い愛着が詩の全編に滲み出ています。

【24】 アメリカでの仏教活動

しかしフェノロサがアメリカで実践的仏教活動を行った記録はありません。シカゴ万博に付随して万国宗教会議が開催され、日本からも多くの仏教者が参加しました。共に桜井敬徳の弟子で、フェノロサ・ビゲロウ改宗のきっかけを作った前美術行政官町田久成も出席したと伝えられていますが、両者が邂逅した記録は発見されていません。

当時アメリカでは東洋の宗教への関心が高まっていたようですが、それは日本仏教ではなく既述した神智学でした。この頃と推定されるフェノロサの神智学に対する痛烈な批判の文書がイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館所蔵書簡集にありました。ガードナー夫人(Isabella Stewart Gardner 1840-1924)に宛てた私信で、夫人の問い合わせに対し、小説家マリオン・クロフォード(Marion Crawford, 1854-1909)の仏教論を反駁したものです。クロフォードは仏教と神智学とを混同している、自分や友人のビゲロウが信奉する真の仏教とは大乘仏教を措いて他にない、そのことを是非理解して欲しい、とガードナー夫人を説得する熱意にあふれた



回峰修行するビゲロウ

書信でした。フェノロサの大乘仏教論は、MFAにおけるフェノロサ最後の企画展となった「大徳寺所蔵中国仏教絵画(五百羅漢図)展」の目録序文にも述べられています。

【25】 ビゲロウ・寛良・岡倉天心

実はフェノロサより深く仏教にのめりこんだのはビゲロウの方でした。掲載した写真(MFA所蔵)はビゲロウが叡山の回峰修行に挑んだときのもの(残念ながら日時不明)です。

帰国してからも故桜井敬徳に授けられた戒律の実践に励み、天台密教から真言密教へと研究を深めています。敬徳没後、法明院は弟子の直林寛良阿闍梨(1849-1922)が継ぎました。寛良は後に敬円と改名、第156代園城寺長吏となった人です。両人の間にあって専ら書簡の和訳、英訳に尽力したのは天心岡倉覚三と弟の由三郎です。天心は単なる翻訳者にとどまらず自らも寛良に疑問を質し解説を求めたことが、法明院所蔵の書簡に示されています。書類は残っていませんが、かねてから師事していた室生寺の住職、丸山貫長阿闍梨(1843-1927)にも真言密教について意見を求めたことがあったと思います。(つづく)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(VII)続き

天心はビゲロウ在日中から、美術のみならず日本文化全般にわたる知識の提供者として、最も信頼を置いた日本人でした。のちに天心をボストン美術館に招聘したのも、理事ビゲロウの推挽によるものです。

ビーコンストリートに邸宅をもつボストンの名家、裕福なビゲロウは法明院の大檀越でもありました。これは1899(明治32)年9月21日付ビゲロウに宛てた寛良の書簡(法明院蔵、訳文発送)ですが、文末に寄贈された蓄音機未着のこと等を記したあと、「月心大菩薩 貴下」と結ばれているほどです。「月心」は敬徳に授与された法号。かつてフェノロサが、「諦信居士殿」と呼ばれていたのと格段の違いです。

1901(明治34年)寛良が、園城寺長吏事務取扱に任命されたのを機にビゲロウに來山を要請。翌年それに応えたのがビゲロウ最後の訪日となりました。

現在法明院には件の蓄音機はじめ地球儀、望遠鏡などが飾られていますが、これらはビゲロウが寄贈したものです。

【26】MFA 助手メアリ・M・スコット夫人

フェノロサが法明院墓域に葬られるに至ったのは、再婚した夫人メアリの意向によるものでした。よってメアリについては多少詳しく触れておきます。

フェノロサのMFAでの任務は、寄託されていた日本美術品(ビゲロウ蒐集品やウエルドに譲渡したフェノロサ旧蔵品)解説目録の作成でした。しかし就任早々のモース・コレクション日本陶器買収の仕事、それに続く北斎展、浮世絵展、絵画・金属工芸展、大徳寺五百羅漢展の開催とその目録作成を独りでこなし、その合間に美術館主催の、また近隣各地から要請される講演会、また各種学会誌・研究誌への執筆に忙殺され、契約満期の前年になっても肝腎な館蔵品解説目録作成の方は進捗しません。1894年10月、遂に理事会は日本美術部に助手の採用を認めました。

フェノロサが選んだのは、当時ニューヨークで女性雑誌『ニューサイクル』の編集の仕事を手伝っていたメアリ・スコット夫人(Mary McNeil Scott. 1865-1954)です。日本での生活体験があり、文芸趣味豊かで日本文化にも理解をもつ南部出身の女性でした。館蔵品の各作品につき、フェノロサの口述をメアリが筆記する仕事が始まります。

【27】メアリの経歴

メアリはアラバマ州モビール出身、ニューオーリアンズではラフカディオ・ハーンを尊敬する美貌の文学少女で、男性たちの憧れの的でした。(ハーンとはのちに來日してから再会、ハーンの数少ない友人の一人になります。)多くのボーイフレンドの中から彼女はダンスの上手なルドルフ・チェスターという青年を選び、結婚して20歳のとき男子アランを生みますが、この年ルドルフが病死、乳飲み子を抱えてメアリは実家に戻っていました。そのうち、かつてのボーイフレンドの一人だったレドヤード・スコット(Ledyard. Scott. ?-1903)から何度も求婚の手紙が来るようになりました。レドヤードはメアリに振られ傷心を抱いて日本に向かい、鹿児島高等中学造士館(現鹿児島大学の前身)で英語とラテン語の教師をしていました。求婚の手紙は日本からのものでした。

チェスター未亡人メアリは遂に再婚を決意、5歳になったアランを連れて日本に向かいました。横浜來着が1890(明治23)年7月26日ですので、12年の任務を終え同年7月6日日本を發ったフェノロサ一家とは太平洋上ですれ違ったこととなります。

しかしこの結婚はわずか1年余りで破綻します。メアリはアランを連れて帰国し、1892(明治25)年2月実家で女兒アーウインを出産しました。後を追ってレドヤードもモビールに戻りますがメアリは同居を承諾せず、結婚生活はすでに修復不能の状態に陥っていました。

その後メアリはモビールやニューオーリアンズの新新聞・雑誌に詩や短編小説を投稿し、又滞日中の見聞等を発表して、次第に女流文学者として知られるようになります。夫から逃れてニューヨークに行き、『ニューサイクル』編集の仕事に携わっていたことは前述の通りです。MFAの助手に採用された時、先夫の子アランは9歳、アーウインは2歳、メアリは29歳になっていました。

1895(明治28)年9月でフェノロサのMFAとの契約は満期となります。同年3月にメアリの身に事件が起きました。別居中の夫レドヤードが娘アーウインの親権を主張して起こした離婚裁判に敗訴したのです。娘を奪われて傷心のメアリを慰める立場になったフェノロサは、ここで重大な決意をします。すでにボストンでは二人のスキヤンダルが広まっていた。レドヤードの離婚請求理由のなかにフェノロサの名が言及されていたのでしょうか。

(次頁へ続く...)

フェノロサ、ビゲロウと三井法明院(VII) (続き)

【28】リジーとメアリ

在日中の地位と高給は忘れがたいものでした。しかし社交好きだった夫人のリジーが黴臭い古画の収集に余り理解を示さなかったことは、在日中の言動によっても容易に想像されます。「私はセーラムのような退屈な所は大嫌い。ニューヨークのような社交的な都会で暮したい」と友人たちに語っていたと、クララ・ホイットニーは日記に記しています。クララはお雇い外人の娘で勝海舟の孫と結婚した女性で、明治初期東京に在留した外国人の動静を伝える日記を残しています。その中で彼女は何度かフェノロサ夫人に触れています。

数少ないリジーの逸話に、夫が能楽師梅若実(1828-1909)について謡いの稽古をしていた時の出来事があります。稽古の最中、同席していた夫人がいきなりツカツカと謡っている梅若に近付き、その下腹を触ったというのです。一同呆気にとられて、今度はフェノロサの喉を指して何とか言っている。後で「師匠の声は腹から出ているのに、あなたは喉で謡っている」と言ったことが分り大笑いになったという話です(梅若万三郎『亀堂閑話』より)。皇居や各省からの園遊会・舞踏会の夥しい数の招待状も残っています。ドレス代も大へんだったでしょう。クララ日記には「英国紳士方からは嫌われた」と書いてありますが、物怖じしない、陽気で活発な女性だったことが分ります。

夫の念願だった日本再訪に関しても余り積極的ではなかったと私は思っています。

一方メアリは、文学芸術に熱中するタイプの、どちらかという内気な性格だったことが、遺された日記などからも読みとれます。フェノロサの口述を筆記する傍ら、情熱的に語る日本美術論は彼女を感動させ、日本再訪の願望を我が事のように理解したことでありましょう。尊敬は次第に愛情に変わって行ったものと想像されます。

【29】離婚・再婚劇

MF A所蔵日本美術品開設目録は、契約満期の95年9月までに遂に完成せず、フェノロサは6ヶ月の休職願いを提出して活動の場をニューヨークに移します。プラット・インスチュートでの美術教育論講義と、『ザ・ロートス』と改題した雑誌『ニューサイクル』の編集と出版に携わるのが主な仕事でした。

MF Aの館長チャールズ・ローリングが理事会にフェノロサの契約更新を求めている最中に、同年10月2日突然、リジー夫人との離婚が成立しました。



新婚時代のフェノロサとリジー夫人

入手した裁判記録によれば、訴因はフェノロサがシカゴ出張中、商売女と関係して夫人の名誉を著しく傷つけたこと。判決は慰謝料、娘ブレンダ(12歳)の扶養料として「年額2600ドル(MF Aの年俸と同額)、プラス今後の収入が5600ドル以上あった場合その半額、フェノロサ名義の5万ドル信託基金の半額、蒐集版画の半分、コレクションを換金した時はその半額」を原告に支払う、という当時無収入となったフェノロサには過酷な内容のものでした。

しかしフェノロサは控訴もせずこれを受諾したのです。金銭上の問題は、日本に行けば何とかするという楽観的な見通しがあったのでしょうか。妻と娘を裏切った背徳の男という汚名と引き替えに、フェノロサは同年12月ニューヨークでメアリと結婚します。

もともとこの離婚劇は、メアリと結婚して日本再訪を実現するために仕組まれた計画のように思われる節があります。まず、潔癖なフェノロサの性格からして、シカゴでの行跡は考えられぬこと。また、莫大な金銭的負担と体面上の侮辱を甘受したこともさることながら、被告の側から積極的に資料を提供したふしもあり、判決を早めるための工作だったのではないかと疑われるのです。

【30】ボストンとの訣別

いずれにせよスキャンダルの発生源となったMF Aが不快感を示したのは当然でした。館長の要請した契約更新に理事会は同年10月「館蔵浮世絵目録作成を条件に2年間延長、但し勤務時間半減、年俸1500ドルに減俸」と決定して不行跡に対する処分としました。(次頁へつづく)

フェノロサ、ビゲロウと三井法明院(VII) (続き)

しかしフェノロサは出勤せず、翌96年1月ニューヨークの浮世絵商W. H. ケチャム主催の浮世絵展「浮世絵の巨匠たち」に協力し同名 “The Masters of Ukiyo”と題する詳細な解説目録を執筆刊行します。

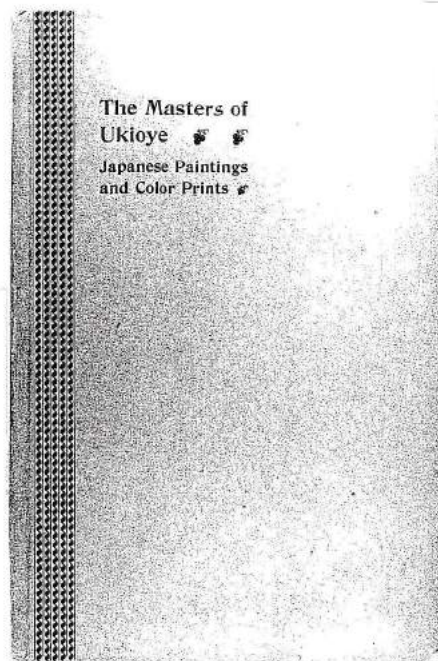
日本美術目録は未完成、せめて館蔵浮世絵目録だけでも発表したいMFAの期待は全く裏切られたこととなります。しかも同書には、かつてMFAが発行し著作権を持つ北斎展目録『北斎とその流派』(“Hokusai and His School” 1893年フェノロサ執筆)から無断引用した部分が目立っていました。MFAはフェノロサに警告文を送付しますが、これに対しフェノロサからは館長宛に「日本美術部所蔵絵画を私に無断で撮影することを禁じられたし」の電報が打たれMFA理事会は激怒し同年4月1日付けで無期休職を通告。これに答えてフェノロサは4月15日付けで辞表を送付、理事会に届いたのはメアリ同伴ヨーロッパ経由で日本に向かう船上でした。

事務引継ぎも行われぬ、ただならぬ辞任劇、作成途中の日本美術品解説目録も行方不明。MFAからすればフェノロサ追放と言った方が当たっているかもしれません。MFA理事会の最も有力理事は他ならぬビゲロウでした。記録は残っていませんが、フェノロサの行跡に最も厳しかったのは謹直なビゲロウだったと思います。

以後長期間にわたってMFAではフェノロサの名は禁句となりました。「フェノロサ・コレクション」も「ウエルド・コレクション」と改称されたほどです。1904(明治37)年以降、MFA中国日本美術部の実質上キュレーターとなった岡倉天心も、恩師の不評には吃驚したことでしょう。フェノロサも生涯ボストンには近付きません。失意と苦難に彩られた後半生の始まりでした。

【31】日本再訪

離婚裁判の判決により、再婚したフェノロサには差し迫って前妻リジーに月額2600ドルを月割りで送金する義務が生じていました。6年前日本から帰国するまでは大臣並の高給(年俸6000ドル)を食んでいたのです。日本に行けば何とかなんと楽観したのは無理ないことでしたが、その思惑はみごとに外れました。友人や教え子たちの懸命の努力にも拘わらず、適当な就職口は全く見つかりません。御雇い外国人を必要とする時代は既に過去のものとなっていました。その上為替レートはこの6年間に100円当り87ドルから52ドルに下落していました。前妻に送金する分だけでも毎月400円以上稼



MFA 訣別の直接原因となったニューヨーク浮世絵展「浮世絵の巨匠たち」解説目録

がなければなりません。

まず手を染めたのは友人の浮世絵商小林文七と組んで在米ケチャムを相手とする浮世絵売買。これが失敗に終わり、文七主催の浮世絵展目録の執筆、また『浮世絵史概説』の出版。2年後ようやく教え子嘉納治五郎の斡旋で高等師範学校と付属中学に英語英文学教師の定職を得ますが、この月給が200円。講演・執筆の依頼はすべて引き受け、何とか糊口を凌ぐのがやっとの有様です。加えて頼みの綱だった岡倉天心は1898(明治31)年、私行を糾弾されて東京美術学校長解職。フェノロサにとっては八方塞がり、日本再訪は失敗に終わったと言えましょう。

次の一手は、帰国して旅芸人ならぬ巡廻講師となり、アメリカ各地で日本を紹介する仕事でした。そのためには更に広く、また深く日本文化を知らねばなりません。再訪3年間の大半はそのための知識の拡大に使われています。古事記・万葉集の勉強、能楽の稽古、謡曲の翻訳、漢字・漢詩の研究、真言密教への接近などがその一環でした。通訳や助言者としてフェノロサの研究に協力したのは、教え子の有賀長雄と付属中学の若き同僚平田喜一(後の英文学者平田禿木)でした。

滞在中メア리를誘って三井寺法明院を訪れ、直林寛良を拜して受戒させたことがありました。離婚再婚で既に戒律を犯した夫婦でしたが、ビゲロウと異なりフェノロサ夫婦の場合、仏教は日本文化の源泉、信仰と言うよりは知識として受けとめていたように思われます。

(続く)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

美術の会

Georges Rouault (1871-1958)

2009年12月28日、Lyonのベラーージュ駅からベルクール広場を経て活気あふれるテロー広場に行くとLyon美術館が見えて来た。10月から始まった近代絵画展の会場に続く通路は、鑑賞者の軽やかな会話が耳に心地良かった。

大きな時計台が聳え立つLyon駅。その近くのアパートに晩年のルオーが住んでいたと言うのを思い出し、先ずルオーの作品に逢いたくなった。個人所蔵の10号位のルオーの2作品の前には数人の人達が目を細め、笑みさえ浮かべ、何か遠い時間からの声を聴く様に・・・見つめていた。

今回、展示されたルオーの作品“聖顔”(1938-1939)は十字架を背負ってゴルゴダの丘を登るキリストの汗をヴェロニカと言う女性が布で拭ったところ、その布にキリストの顔が現れたと言う伝説に基いてルオーは描いていた。両側に描かれた黒い、太い髪の毛の線と細長い鼻の線が画面全体に静けさと落ち着きを与えている。

同じくルオー描く“ピエロ”(1938-1939)はたっぷり太い線で描かれ、構図は極めて単純である。大きく見開かれた穏やかな目と優しい唇が印象的であった。ブリジストン美術館所蔵、ルオー1925年のピエロと比べると1938年の“ピエロ”は歓喜に満ちている。1925年のピエロは背景の黒の中に大きな重い顔が浮かびあがって来る。その重さはルオーが背負った人生の重さなのか・・・伏し目のピエロの心は重く悲しい。ルオー没して52年。ルオーは夕方になると描く手を止めて、アトリ

エの窓のそばにある椅子に座り、Lyon駅の時計台辺りを眺めていたと言う。昔は時計台の向うには高い建物はなく空がぼら色に染まり、沈み行く太陽が見られたと言う。

美術館の中庭の数ある古き彫刻に夕日が当たり、また1日が静かに暮れようとしている。

(次号につづく)

酒井 典子



ピエロ 1925



ピエロ (Pieterrot) 1938-1939



聖顔(La Sainte Face) 1938-1939

音楽の会報告

オーボエ界の第一人者を迎えた

第4回ホームコンサート

9月3日、ボストン交響楽団の準主席オーボエ奏者であり、ボストン・ポップス・エスプラナーダ・オーケストラの首席奏者でもある若尾圭介氏が、NHK 毎日音楽コンクールの審査員として帰国されたのを機会に、ご好意により忙しい中の時間を割いて、日本ボストン会のための演奏会を催してくださいました。

このイベントには、若尾氏の恩師であり、元日本フィルの首席オーボエ奏者でもある新松敬久氏も加わり、日本オーボエ会の重鎮2人が揃ったの豪華なコンサートになりました。ピアノの伴奏はニューイングランド音楽院を出た石川咲子さん。

オーボエの哀愁をおびた、美しい音色は秋にふさわしく(もともと、猛暑日でしたが)、聴衆をいたく魅了。サロンのような雰囲気の中で自由な形で進めたいとの若尾氏の希望で、話を交えながら楽しい演奏会となりました。若尾氏の4歳半になる可愛いお嬢さんもヴァイオリンで共演。出席者にとって、滅多にない貴重な経験になりました。

演奏会後は例によって懇親会。会話が弾み、時間が過ぎるのも忘れるほど。若尾氏は、日本ボストン会のメンバーのレベルの高さにいたく感銘を受けたとのことでした。

(幹事 関 直彦・尚子)



投稿

言葉と文化 (II)

ゆとりの言葉=日本語

法眼 健作

前回の会報に、ヨーロッパ諸言語のルーツたるペルシャ語について述べた。現代のイラン人の非妥協的態度の背景には、「英語もフランス語もドイツ語もロシア語も、もとはといえはペルシャから学んだくせに、その家元を軽く扱うとは何事だ」という憤りとフラストがあると思う。

今回は予定を変えて日本語である。何年も前のことだが、在京外交団のあるパーティでフランス大使館の一等書記官に会った。この人はその数ヶ月前に北京の仏大使館から東京に転勤になったばかりであった。私に対し、「日本語を勉強したい。自分は中国語が専門だから漢字は問題ないので、早く進歩すると思う」と言った。それから約一年後その人と再会した。信じられない程日本語が上手になっていた。そしてその人は「法眼さん、失敗しました。私は中国語を選択しましたが、始めから日本語の専門家になるべきでした。こんなに素晴らしい言葉はありません。」と言う。どういうことかと詳しく聞くと、(一)表現に規制がなく、言葉の組み合わせが自由である。

(二) 外来語をオープンに取り入れてそれを簡略化し日本語化する。(三) 接続語及び接続句が無限に近く存在し、その結果表現力が圧倒的に高まる。(四) 中国語は規制だらけで無味乾燥。日本語にある「遊び」や「ゆとり」は無い、ということであった。その通りだと思う。その人は他にもいろいろな理由を言ったが、要するに日本語はこの世に稀な自由な言葉ということらしい。

そのことで一つ思い当たることがある。言葉と音楽の関係である。日本の現代の音楽、その主流はいわゆる流行歌であろうが、色々なジャンルがあるが、共通して言えることは、編曲の素晴らしさである。中国、香港の音楽関係者によれば、日本の音楽、「演歌」であれ、「ロック」系であれ、今売り出しの中の「嵐」であれ、「AKB48」系であれ、その編曲の素晴らしさには中国人は圧倒的に及ばないそうである。

中国では日本のこれら音楽は大人気であるが、その背景には、中国の音楽にはない日本の音楽の編曲の素晴らしさであり、そのような自由、イマジネーションに富む編曲を行わしめるのも、日本語という自由に富む言語であるがゆえと考える。

読者の皆様もテレビやラジオで日本の歌を聞く時、心してメロディーに伴う編曲の美しさと素晴らしさに留意して頂きたい。我々が普段気づかない日本の素晴らしさが、ここにもあるからである。

「一繕乃会」活動報告

一繕乃会 (ひとつくろいのかい) の発足

水野 賀弥乃

会員同士の交流と地域社会の改善の一端に寄与することを目的として、本年2月に幹事会にご承認を頂き立ち上げました。3月からの活動報告を申し上げます。

1. 平成 22 年 3 月 13 日(土)第 7 回アート・ゲート・プログラム(美大生支援のチャリティー・オークション)
2. 平成 22 年 3 月 27 日(土)セカンドハーベスト・ジャパン(上野公園での炊き出し)
3. 平成 22 年 6 月 5 日(土)セカンドハーベスト・ジャパン(上野公園での炊き出し)
4. 平成 22 年 6 月 19 日(土)第 8 回アート・ゲート・プログラム(美大生支援のチャリティー・オークション)
5. 平成 22 年 9 月 25 日(土)セカンドハーベスト・ジャパン(上野公園での炊き出し)

第一回目の活動は美大生を支援するためのアート・オークションでした。大手企業により支援されている社会貢献活動です。三好美智子様をご参加くださり、ワインとフィンガーフードを頂きながら、美大生の作品と作家との会話をお楽しみ頂きました。

つい先日行いました第五回目活動の上野公園での炊き出しには、台風 12 号の影響で雨模様の中にも関わらず鶴正登会長御夫妻がご参加くださいました。セカンドハーベストの活動に若者が多く活躍していること、多くの企業や団体、個人が協賛していること、外資系企業の積極的なボランティア参加に感心されたところのご感想を頂きました。又テレビではなく、ホームレスの人々の整然とした行列と行動等を目の当たりにされ、驚きとともに感心したとお話頂きました。炊き出しの準備と配給活動には少々の体力が要りますが、経子会長夫人からは、「気持ちの良い疲れ」とのご感想を頂きました。

当日は 687 人のホームレスの人々に 781 人分の温かい食事を配給いたしました。今回は、大量の玉ねぎやセロリを切り、丸二日間もセロリの香りが抜けませんでした。炊き出し活動を通して初めての経験をし、考えさせられる良い機会になりました。

12 月 11 日にはアート・ゲート・プログラムへの参加を予定しております。お時間のあるときに、地域社会のほつれを「ひとつ繕い」する活動にご興味のおありの方は、一繕乃会まで、日本ボストン会のホームページよりご連絡くださいませ。

ART GATE PROGRAM に参加して

(3 月 13 日、土曜日、開催)

三好 美智子

一繕乃会の水野様のご紹介で、はじめて ART GATE PROGRAM に参加する機会を得ました。

最初は興味本位で、実際のオークションはどういうものだろう、今の若手芸術家(芸大生や卒業後 3 年以内)はどんな絵を描くのだろうと気楽な気持ちでした。

けれども、内心、果たして「わたくしのような素人が参加してもよいものか」、とても緊張しました。オークションの会場は丸の内の三菱商事ビルでした。

オークション開始前、参加者はワインやシャンパンのグラスを手に、出品作品やその作家と間近に接し、作品をじっくり見たり、作品についての情報をえることができました。

今回の作品はほとんどが日本画で、普段油彩画を多くみている私にとって、とても新鮮で、日本画の線や色調のすばらしさに見とれてしまいました。

31 点どれもすばらしく、魅力的な作品で、家に飾ってみたいものばかりでした。オークションは 1 万円から始まりましたが、競り落される値段はわたくしには手が届きませんでした。(最高落札価格 38 万円。)それでも気に入った作品はパドルを上げれば、「作品が気に入った」という意思表示であり、画家に勇気と自信をあたえる」ということを後で水野様から伺いなるほどと思いました。このプログラムに参加して 2 つの大きな感動を得る事ができました。

このようないろいろな意味で厳しい環境のなかで、若い芸術家ががんばっている姿を間近にみられたことで、とても勇気づけられました。(芸術は人を感動させ、こころの糧となり、社会に欠くことができないものですから。)

そして彼らを応援する企業があることを知ったことです。三菱商事はこのようなプログラムを通じて、芸術美術を志す若者への奨学金を提供していることを知り、心の中で拍手をおくりました。

実際、絵を競り落すことはできませんでしたが、プログラムに参加できたということで、かげながら若手芸術家を応援したいという気持ちになれたことです。

今回は 7 回目だそうです。ぜひ、永く続いてほしいと願い、機会がありましたら又参加させていただきたいとおもっています。

ありがとうございました。

2010年紅葉狩り

- 1 日時：12月4日(土)08:00~16:00
- 2 場所：奥養老溪谷 粟又の滝周辺
(帰路は勝浦一九十九里経由予定)
平坦な溪谷沿いの小道を1時間程度散策
- 3 交通費：マイクロバス中型チャーター予定
東京駅丸ビル前出発・帰着
- 4 定員：25名 先着順
- 5 費用：7,000円~10,000円目安
(参加人数によりマイクロバス代分の個人負担が変更になります。)
- 6 食事：昼食は日帰り温泉で検討中
- 7 第一次申込締切：10月15日(金)
(マイクロバスの予約、日程詳細決定のために、取敢えず人数確認のため。)
- 8 申し込み先：藤盛紀明・富美子、水野賀弥乃

ゴルフ懇親会の報告・案内

日本ボストン会の平成22年春季ゴルフ懇親会は4月15日(木)川崎国際生田緑地ゴルフ場にて開催を予定したが、当日、悪天候のため中止しました。

次回の懇親ゴルフ会は11月25日に以下の要領で行います。(チラシ参照)。

日時：11月25日(木)7時51分第一組スタート
場所：川崎国際生田緑地ゴルフ場

小田急線向ヶ丘遊園地駅下車、タクシー10分。
プレー代：16,000円。チェックイン時に各自現金払い。カードは一切使えません。

参加費：4,000円(懇親会費用・賞品代)
申込数：4組(16名)で、申込順に一杯になり次第締め切ります。

集合：午前7時35分アウトコース 1番ティー付近に集合

初参加の方々大歓迎!お申込みをお待ちします。
幹事連絡先：山崎恒

名古屋ボストン美術館の展覧会

名古屋ボストン美術館では、「ボストン美術館 浮世絵名品展 第二弾 錦絵の黄金時代—清長、歌麿、写楽」において、約140点が2010年10月9日から2011年1月30日まで展示されています。

現存が珍しい喜多川歌麿の初期の作品や、役者絵や歌麿の絶頂期の大首絵、東洲斎写楽の作品変遷を辿れる21点が一堂に会するのが見どころです。

問合先：名古屋ボストン美術館TEL052-684-0101
〒460-0023名古屋市中区金山町1-1-1

美術の会・歴史を飲もう会共催

「国立西洋美術館の建築」見学会

- 1 日時：11月6日(土) 午前10時25分迄に集合
- 2 集合場所：正面玄関右横のロダン作『地獄門』前
- 3 交通案内：JR上野駅上野公園口より徒歩2分
- 4 見学：「国立西洋美術館の建物」
フランス人建築家ル・コルビジユの作。
世界中にある氏の作品を一括して世界遺産に申請中。
- 5 案内者：
技術説明 藤盛紀明 当会 副会長
一般案内 三好美智子(同美術館ボランティア)
当会歴史を飲もう会幹事
- 6 昼食：参加人数を勘案し、担当幹事でレストランを選定
- 7 解散：午後1時半頃(前後するかも)
- 8 費用：観覧料 @420円
但し高校生以下、65歳以上、身体障害者は無料、
(入館時に学生証、年齢確認できるもの、障害者手帳などを提示)。
*昼食代は各自にご負担願います。(各自がメニューから選定願います。)
- 9 申し込み先：10月23日までに下記幹事まで
[参加者の代表者氏名と人数]をお知らせ下さい。

担当幹事

*酒井一郎

*三好彰

「伝統芸能同好会」の発足

第2回目の鑑賞会の打診が茂木顧問から頂き、伝統芸能同好会の発足を決めた。会長に吉野静子幹事、実務担当に滝沢典之幹事をお願いした。

12月に国立劇場にて開催を計画している。

音楽の会「葦と角」ジョイント・リサイタル

当会の会員である笠原慶昌さん(ホルン)、西入優子さん(オーボエ)が金澤亜希子さん(ピアノ)とのジョイント・リサイタルを次の予定で開催されます。当会会員と言えば、優遇されますので、是非、このリサイタルにご支援をお願いいたします。

日時：2010年10月26日(火)19:00開演
会場：スタインウェイサロン東京 松尾ホール
(日比谷マリビル、地下1階、日比谷公園前)

問合先：山野楽器ウインドクルー
TEL03-3366-1106

(チケット)：03-5250-1062 (直通)

石川喜子さんの訃報を受けて

8月19日喜子さんが自宅で事故死されました。ボストンの知人からのメールで知り、余りにも強いショックで心臓がドキドキするのが長い間続き、様々なことが思いだされました。

喜子さんは内科医の石川定先生の夫人で、約50年前に日本人形の親善大使としてニューヨークに来ていたときに先生と知り合い、先生の強い希望で帰国を断念され、結婚されて息子さんを授かり、それ以来のアメリカ生活でした。

喜子さんとは約20年前、ボストン日本人会婦人部発足準備会がスタートしたときからのご縁です。

喜子さんは婦人部長をなさったり、クラブの責任者として、また自宅を提供して下さるなど多大な功績を残されました。喜子さんの生前からの要望と石川先生の御厚意で、これからもご自宅一階を婦人部の活動拠点として自由に使用して頂けるように鍵まで渡されているようです。

最後に喜子さん、永い間の婦人部役員、部員としての活躍お疲れ様でした。ありがとうございました。心からのご冥福をお祈りいたします。(享年89歳)

吉野 静子

(1961~63、65~2009年ボストン在住)

日本ボストン会観桜会の報告

今年の観桜会は4月4日(日)午後6時頃、千鳥が淵の三井アーバンマンション前付近で集合、緑道を歩くのに懸念された混雑もなく、ライトアップされた満開の桜を楽しむ事ができました。集まりはHCJのゲスト12名を含め総勢30名になり、ホテル・グランドパレス内の「カトレヤ」において、楽しい会話とお食事を楽しみました。(別掲写真参照)

毎年、同じ千鳥が淵での観桜会となり、参加者も地下鉄「九段下駅」から直接集合場所まで歩くのではなく、JR「有楽町駅」からお堀端を歩くとか、地下鉄「竹橋駅」から北の丸公園を經過お堀越しに千鳥が淵の桜を眺めるとか、東京国立近代美術館工芸館、或いは日本武道館付近を散策してから到着するなど、ルートを変えて参加される方が増えています。

花形歌舞伎「金門五山桐」観劇の会

会報第35号にてご案内した観劇会(3月5日)は、当会の会員・家族・知人20人が午前11時に集合、茂木賢三郎顧問から現在のお仕事の模様を伺い、正午から午後3時まで、久しぶりの歌舞伎を楽しんできました。

国立劇場3月の出し物は、歌舞伎の有名な作品「通し狂言金門五山桐」を短い演目に纏め、若手の中村橋之助、中村扇雀を中心に、人気役者が早変わりです。違った役を演じてみせる楽しい芝居で、見所には橋之助が演ずる石川五右衛門の宙乗りがありました。

歴史の会・美術の会(4月24~25日)

名古屋ボストン美術館見学と伊勢神宮参拝を企画したが、参加者が少なく中止しました。(酒井一郎)

第67回幹事会記録

日時:2010年6月18日(金)午後6時半~9時

場所:新宿サミットクラブ、24名出席

*鶴正登会長、ご挨拶及び長島雅則氏を次々期会長候補として推薦したい、了承。

*事務局報告:新会員 桜井武雄氏(吉田博氏紹介)、大場満寿夫氏(HCJの紹介)2家族。

*事務局:藤盛富美子さんから鶴経子さんに交代する。(連絡先:会報1ページ表題下の住所・Fax)

第68回幹事会記録

日時:2010年9月22日(水)午後6時半~9時

場所:新宿サミットクラブ、24名出席。

*法眼健作次期会長候補:ご挨拶と幹事への協力要請があった。

*藤盛副会長:長島雅則氏には次々期会長候補として幹事会にご参加願うことにしたい、了承。

*事務局報告:新会員 久野揚子さん(米国在住)、中井哲哉さん(近藤副会長の紹介、これから手続)

*「伝統芸能同好会」の発足を決定。

*総会準備:近藤副会長より現下の日米関係に鑑み「日本とニューイングランドの絆の再発見」を総会のスローガンとしたいとのご提案があった。

*次回幹事会:2011年1月28日(金)

日本ボストン会イベント

*一繕乃会(2HJ) 於浅草橋及び上野

9月25日(土)

*ハイキングの会 於目黒周辺

10月3日(日)

*美術の会・歴史を飲もう会(国立西洋美術館建物を見学) 11月6日(土)

*総会・懇親会(NEC 三田ハウス芝クラブ) 11月19日(金)

*懇親ゴルフ会(川崎国際生田緑地ゴルフ場) 11月25日(木)

*紅葉狩りの会(奥養老溪谷を予定)

12月4日(土)

*一繕乃会 Artgate Program 於丸の内、三菱商事ビル内 12月11日(土)

*伝統芸能鑑賞会 於国立劇場

12月予定